

平成26年度 兵庫県立人と自然の博物館協議会

日時 平成27年3月13日（金）14:00～15:30

場所 県立人と自然の博物館 大セミナー室

1 開 会

2 館長挨拶

3 議 事

(1) 報告事項

「小さな学校キャラバン」の取り組みについて

「丹波竜」記載論文出版及び記載命名等について

博物館研究シンクタンク活動について

(2) 協 議

来年度の事業計画について

(3) 施設見学

4 質疑・意見

・博物館

ひとはく開館20周年から、2年が経った。この2年間で、博物館の歩んでいく方向が変わってきたと感じる。国立科学みらい館では、評価シートの一つにどれだけ著名な外国人を集めてきたかという項目があることや、アニメ作家集団とのコラボによる事業で、たくさん子どもと保護者が来館していた。その館では見たことがなかった光景を目の当たりにし、感心した。

一方で、「小規模博物館」ネットワーク（小さいとこネット）の顧問をしている。県立や国立の大きな館に、小規模館がいかに関われないようにしていくかを目的に会合を持っていて、今年度で5回目を迎えた。当初40ほどだった加入館も、60を超えるほどになった。

日本の博物館は、どの館も財政難等の理由で、館の個性をハードからソフトや運営の充実に力点を置く方向へシフトするようになった。

そこで、今日報告する「小さな学校キャラバン」活動やシンクタンク活動は、これからの「ひとはく」が歩む新しい方向を、お示しできるかもしれないと思っている。

また、この場は「ひとはく」の協議会であるけれども、これからの日本の博物館がどう歩んでいけば良いのかを、ご助言いただける場になればと思う。

(博物館による事業報告)

・委員

博物館にも、遺伝子の研究を導入しないといけないなと思いつけていたが、今日のスポンの話の話を聞いて、最先端の研究でレベルも高いものが行われていることが分かって良かった。

・委員

普段、環境教育コーディネーターや野鳥の会の代表を務めている。「小さな学校キャラバン」、本当に素晴らしいと思って、話を聞かせていただいた。待っているだけでなく、出かけていこうというコンセプトが素晴らしい。私も小学生対象に、放課後の体験学習や、その延長として「環境寺子屋」というものを設置している。ただ、民間が寺子屋を開設しても、展示物等の充実がなかなか難しく困っている。そこで、国立民族学博物館が行っている「みんぱっく」という貸出制度のようなものを、ゆめはくのパログラムの中に組み込んでいただくと、現場ではありがたい。

・博物館

使いやすい、ボックスに入ったようなものはないが、要望があれば臨機応変に対応はしている。もう少し広報や、皆さんに知っていただく取り組みが必要かと思う。

・博物館

補足しますと、昔はミュージアムボックスのようなものを作って貸し出していたが、こちらからアレンジしたものは、あまり使っていただけなかった。利用される方の要望を聞いて、貸し出し品を準備して持って行くので、ニーズには応えられていると思う。

・委員

「小さな学校キャラバン」、素晴らしい事業だが募集時期を見直してほしい。4～5月に募集をかけるとのことであったが、学校の新年度の予定は3月の今頃組んでしまうので、この時期までに募集や広報をかけてほしい。でなければ、年度計画に割り込む形になってしまう。

もう一つ、中学校の立場から申します。本校の生徒も「トライやる・ウィーク」でお世話になっている。当館を始め神戸市博や兵庫県美でも体験する中で、中学生にもなると、展示物よりも研究員や学芸員の活動に興味を持つ子が増えてくる。調査や資料収集など、研究活動について生徒に見えるような活動を体験させていただければと思う。それが、本人の進路を考える際の材料にもなると思う。

・委員

何か、中高生にターゲットを絞った活動は、行っていますか？

・博物館

高校生対象には、学校と連携協定を締結して授業を行っている。中学生についても、同様の連携事業を始め、個人的に中学生限定のセミナーを続けている。

- ・博物館

中学生対象の事業として、先ほどの「トライやる・ウィーク」について、三田市を始め神戸市北区や丹波市からも、生徒を受け入れている。高校生については、「県庁インターンシップ」という高校生就業体験事業で、調査活動の補助などをしてもらっている。

また、来館いただいた学校については、特注セミナーを準備して、研究員のセミナーを実際に受けてもらうなど、いろんな提案をさせていただいている。

- ・委員

地域学習の取り組みとして、報告を面白く聞かせていただいた。人博は人と自然とうたっている以上、狙いは環境を通した人づくりや地域の場づくりであると思う。今日は、地域啓発からお話をいただいたが、今後は環境啓発や産業活動とつなげた活動が展開されると思うが、その方面からの取り組みについて、お話を伺いたい。

- ・博物館

丹波の森づくりへの協力やコウノトリの郷、ジオパーク、渦潮など地域に合わせた環境作りの取り組みの中で、まさに上甫木委員がおっしゃったようなことをやろうとしている。

先週、台湾に行ったテーマがコミュニティ保全と環境保全だった。東南アジアでも、そのことについて研究や取り組みが大切だという流れになっていると感じた。

- ・委員

私は、人と自然の博物館の「人と」の部分にこだわりを持っている。「小さな学校キャラバン」において、子どもだけでなく近隣の人にも開放しているのが良い。自分たちの住む地域や動植物とどう関わっていくか、考えていくきっかけになる活動だと思う。

先の報告のビデオの中で、生物についての話をするだけでなく、人との関わりを説明しましたとあったが、具体的にはどのような説明をしたのか。

- ・博物館

特に地元の生業、例えば山なら林業とか、島なら漁業とかが昔からあったが、それらが衰退してへき地校になった側面がある。そういった面を事前に訪問先の教員と打ち合わせて、地域学習に結びつけているが、もう少し違う専門的角度から提案している。私は植物が専門なので、植物を通した地域学習をしてほしいと要望があった。地域の暮らしや生業があるので、それらを掘り起こして次の世代に伝えていく役割が重要かと思う。具体的にどうやるかは、教科書の通りに教えるわけではないので、どんな工夫をするかなどが今後の課題である。

- ・委員

人と生物の関わりを示すことは大切だと思う。先のビデオにも、近くの川に棲む生物を取り入れて話をしたとありましたが、その事実と絡まってその生物の餌や住環境、その周りに住む人間の暮らしや産業活動など、あらゆるものが関わってくると思う。標本を見せて「すごいね」で終わるのではなく、生態を意識できるようなものを組み込んでいただけると、へき地校と呼ばれる地域では

人と動植物の結びつきが、まだダイレクトに残っているところなので、人と自然について考えるのに取っつきやすいのではないかと思う。

- ・博物館

ビデオにありました神楽（しぐら）小学校は、当館の旧職員がかつて赴任していたなど、ゆかりの深い学校です。3～4代前の校長が、学校にビオトープを造りたいと相談してきた。当時のPTA会長が木材店社長で、材料を出してくれて造った。元々、近くの川に生息するバイカモの研究で有名だったこともあり、その活動には前向きだったことも述べておきます。

- ・委員

地域に出かけていくことで、逆に博物館にとっても地域を知る、生態を知るなどのプラス要素がありそうですね。

- ・委員

お金も人も限られた中で、いろいろ要求するのは申し訳ないが、「小さな学校キャラバン」はどんどんやってほしい。本県も人口が減っていく中で、子どもたちに対する活動が、郡部のまちづくりを元気づけているというアピールを、もっとしてほしい。

あとは、一度行ったきりでなくその後のフォローアップをしてほしい。打ち合わせで行き、事業で行き、終わってからまた行くのかと言われそうだが、フォローアップ活動が、まちを更に元気づけるので。また、行った先の教員がフォローアップ活動で、当館のカウンターパートを担うリーダーとなってもらえる。

NHKに映像を撮ってもらうのも良いが、館独自で撮影した映像もある方が良い。それをアーカイブして、来館者に見てもらおう仕組みを作ってほしい。

最後に、研究員が成果を発表されていたが、それらが社会教育や生涯教育とどう結びついているのか、それが一番難しいところではあるが、それをしっかりアピールしてほしい。

- ・委員

「小さな学校キャラバン」は、地域再生モデルとして良いんじゃないか。ぜひ、次の科研のテーマとして、取り上げていただけるのでは。そうすると、次につながっていくのでは。

サポーターというところでは、人と自然の会など人材が育ちつつある。そういう方と連携して事業を進めてほしい。たぶん、そんな事業も展開していると思うが、その辺りについてお聞かせいただきたい。

- ・博物館

科学コミュニケーターの育成について、一例をお話しします。

研究員が高齢者大学の講師として10年ほど招かれていて、3年前からその卒業生たちとKidsキャラバンというものを実施している。小さい子どもにターゲットを絞った活動で、地元の児童館を訪問して自然学習を行い、地域の年配者と児童館をつなぐ役割を果たしている。今後も、継続して行いたい意向である。

- ・博物館

最近では、まちおこしの道具として、「ゆめはく」が活用されている。HPを見て、地域おこしグループからの呼びかけがあって、そのお手伝いをするとか、当館の地域連携グループと一緒にやって事業をするとかもしている。

- ・委員

地元の小学校として、ひとはくには大変お世話になっている。3年生次に水辺の生き物、4年生次に環境学習、5年生次に自然学校、6年生次に大地のつくりで丹波竜を活用した教育をしている。夏休みのイベントなど事業の打ち出しは、もう少し早い時期にさせていただくと、現場としては助かる。子どもたちも、いろいろと忙しく予定が埋まってしまうので。

県には、(入館料無料で)いつでも行けるような仕組みを作っていたので、ありがたいと思っている。5年生は自然学校に出かけるが、その帰りに山南の発掘現場で化石探しをした。ある女の子が、小さなカエルの脚の化石を見つけて、喜んでいて。足立先生がその場で、命のつながりについて強調されて、「そのカエル、1億年前くらいのもだけど、今のカエルと変わらないだろ?」と。重い言葉だし、大きな言葉だなと思い聞いていた。その後、女の子は夏休み中、親に発掘現場へ連れて行けとせがんだとか。子どもたちにそういった感動や感激の体験を与えてもらえるような活動を、今後とも続けていってほしい。

- ・委員

当館の巡回展示を大阪のキッズプラザで実施している。ひとはくは、教育普及の事業が非常に充実していて、普段見過ごしているものに、実はすごい価値があったと一番驚かされるし、興味を引く取り組みをされている。資料を見ると、キャラバンによる利用者数が約32万人と、かなりの数に上っていて、研究で忙しい中、事業の充実のため全国回っておられるのだと、感心した。

丸谷委員からあった貸し出しキットについてだが、実施に当たっては担当職員の配置が必要だろうし、破損や紛失の問題もあろうかと思うが、学校の要望に基づいたものを持って行けば、ニーズはあると思う。

- ・委員

キャラバンは昔から実施していたが、ゆめはく導入で何か変わった点は?

- ・博物館

搬出入や輸送が容易になることで、ニーズが多様化し、「ゆめはく」の出動を依頼するケースが増えた。例えば、フェリー「さんふらわあ」の船内イベントや、東条湖おもちゃ王国での「はたらく車大集合」など、今まで行ったことがないようなところへの引き合いがあった。

また、デザインが可愛いので、行くだけで喜ばれるということもある。来年度は未定だが、ランドマークとのコラボ撮影、例えば富士山と「ゆめはく」、明石大橋を走る「ゆめはく」など、楽しく事業を展開したいと考えている。

- ・委員

「ゆめはく」、もう一台必要なのでは？

- ・博物館

もう一台必要と考えている。

- ・委員

小学校3年生対象の環境体験活動のお手伝いや、自身の大学院での研究で、ひとはくには、お世話になっている。また、小学校3年生の環境体験学習一つをとっても、ひとはくが果たす役割は大きいと、日々感じている。

野鳥の会代表なので、子どもたちには野鳥博士として話をするのですが、私はまがい物博士である。そこで、本物の博士に会わせたいと、当館の先生にお願いして、お話をしていただいた。

遠藤先生は決してお話しが上手ではないが、1時間かけて訥々と話す内容には、子どもたちに伝わるものがある。普段1時間の授業がじっと聞いていられない子が、じっと話を聞いてメモを取っていた。話が終わった途端、「おなかが減った」と泣き出し、空腹を忘れるほど集中していた。それほど、本物の博士の話は魅力がある。

小学3年生でも、本物に出会うと感動して、自分の未来も描けるほどの価値を持つものなんだと、実感した。研究員の皆さんには、忙しいと思うが研究に終わらず、未来に志をつなぐ役目もあると自覚していただいて、学校のメニューに合わせた対応をお願いしたい。

また、教職員対象の研修で自然体験のメニューの講師をすることがあるが、教職員の約1割が子どもの時に自然で遊んだ経験がないという。だんだん自然体験が少ない教員が増えてくる中、ぜひ体験型の研修を多く取り入れていただくことが、先生方の人としての幅を広げ、社会教育でも実のあることだと思う。

- ・博物館

地域連携、人と人との連携について、貴重なご意見ありがとうございました。

改革を声高に叫んできたひとはく、学校の先生方の先に行く企画をと思い、活動してきたつもりだが、公立館の宿命か、また後手にまわっている部分を、今日の会議で痛感しました。

本日は、ありがとうございました。